

宋元時代の紅巾軍と元末の彌勒・白蓮教匪に就いて (中)

重松, 俊章

<https://doi.org/10.15017/2339191>

出版情報 : 史淵. 26, pp.137-154, 1941-11-25. 九州帝国大学法文学部
バージョン :
権利関係 :

宋元時代の紅巾軍と元末の彌勒・

白蓮教匪に就いて (中)

重松俊章

(一) 導

言

(二) 彌勒・白蓮兩教の關係

(三) 宋元時代の紅巾軍と紅巾の意義

(以上、第二十四輯所載)

(四) 元末紅巾教匪の種別と活動の情勢

(以上、史淵第二十六輯所載)

(五) 明太祖の出身とその人物・政略

(a) 明初史料の確實性^{ナカニシテ}

(b) 明祖の人物と政策

宋元時代の紅巾軍と元末の彌勒・白蓮教匪に就いて

(c) 大明國號の由來

(*) 元末教匪亂の諸原因

(七) 結 論

(以上次輯所出)

(四) 元末紅巾教匪の種別と種別と活動の情勢

余は本誌第二十四輯に於て、元末の彌勒・白蓮兩教の關係を説くと共に宋元當時の紅巾軍と稱するものが必ずしも之等兩教と本質的な關係を有するものでないといふ事實を立證したが本誌に於ては元末發亂當時に於ける之等紅巾教匪軍の種別・由來とその活動の情勢竝に消長等に關する諸項目を敍べて當時の革命動亂の根源を究明しよう。

元明時代の正史・實錄を始め、各種の史料に據つて見る時は元末各地に濫起した紅巾教匪の種別は可なり多數に上ぼつてゐるやうである。今假に權衡の庚申外史の列擧する處に據ると、

(1) 穎上軍チン(杜遵道、劉福通等)

- (2) 斬黃軍（彭和尚、徐壽輝等）
- (3) 湘漢軍（布王三、毛海馬の南北鎖軍）
- (4) 豐沛軍（芝麻李等）
- (5) 山東軍（毛貴、田豊等）
- (6) 四川軍（明玉珍等）
- (7) 淮南軍（郭子興、朱元璋等）

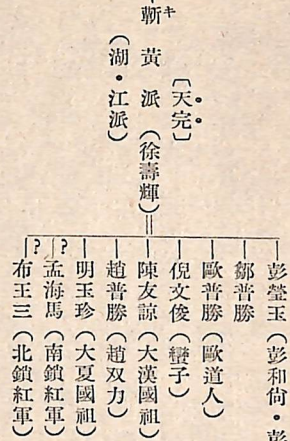
などが其の主なるものとなつてゐる。併ながら當時の確實なる史料の記述する處を精細に比較考察する時は之等諸多の紅軍は大體に於て、江西袁州（宜春）の妖僧彭和尚（名、瑩玉）の彌勒教系と河北趙州欒城の韓山童（韓學究）等の白蓮教系との二大系統に分類することが出来る。前者は徐壽輝・鄒普勝等の斬黃派の紅巾教匪として發展し、後者は劉福通・杜遵道等の汝潁（潁上）派及び之に響應合流せる一聯の香軍（紅巾軍）として發展し、而も之等の二大系統の紅軍は發亂當初には相互に氣脈を通じ首尾相響應して活躍を續けたやうである。而して芝麻李の徐淮軍（豐沛軍）や毛貴・田豊等の山東軍、布王三・孟海馬等の南北兩鎖軍（湘漢軍）、郭子興等の淮南軍などはいづれも之等兩系統中の一分派、一枝隊に過ぎなかつたやうである。

今試に當時の紅巾教匪の種別を表示すると大要下の如くなるであらう。

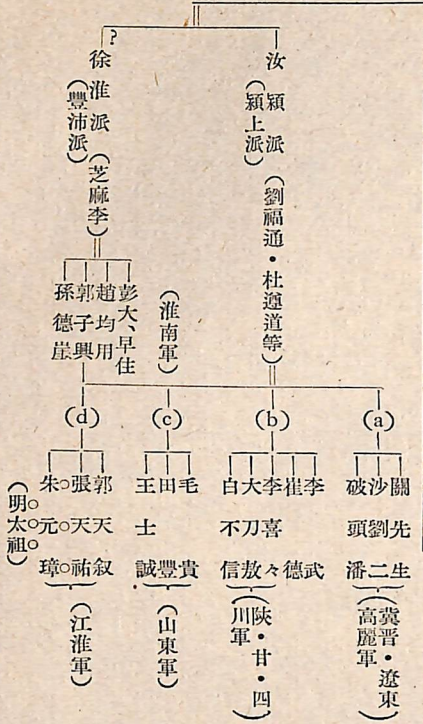
紅巾一覽表

宋元時代の紅巾軍と元末の彌勒・白蓮教匪に就いて

I 彌勒教系 (趙丑斯・郭菩薩・胡椿・彭瑩玉・周子旺等)



II 白蓮教系 (韓某) ○ 韓山童 韓林兒 (龍鳳) 小明王 (學究)



此の表中、徐淮派の芝麻李と韓家の白蓮教會との關係が稍々鮮明を缺いてゐるが、余は、庚申外史の記事に、

至正十一年五月潁川紅軍起。號爲香軍。蓋以燒香禮彌勒得名也。其始出趙州深城韓學家。已而河淮襄陝之民。翕然從之。故荆・漢・許・汝・山東・豐・沛以及兩淮皆起應之。

とある文面から推測して姑く之を韓家の白蓮教系統下に入れた。次に郭子興等の淮南派の紅軍も兪本の皇明紀事錄に至正十二年正月定遠縣富民郭姓者。燒香聚衆。稱亳州制節元帥。十一月起定遠縣。(前年?)。二月二十六日。

克濠州。

とある文と、並に庚申外史に芝麻李が發難當時徐州に據つて附近各地を經略奄有した地名の中に安豐・濠・泗云々とある事實に由つて姑く之を徐淮派の下に屬せしめたが、芝麻李が韓家の白蓮教系に直屬する紅軍であるとするといつれにしても淮南軍(郭子興)はその始めから小明王麾下の一枝隊と見て差支はないのである。仍で上掲の如き表を作つたのである。

楮又、明の陸深はその著平胡錄に於て蒙古帝國倒壞(平胡)の陳吳の役割を演じたといふ意味からか、此の書中に於て小明王と徐壽輝並に陳友諒の三人の傳記を收録してゐる。陳友諒は徐壽輝麾下の驍將で後には徐壽輝の天完國を推倒し親から之に代つて大漢國を建て、龍鳳(小明王)麾下の吳王朱元璋と天下を争ふた人物であるから之を徐壽輝の下に附傳したものであらうが、天完(徐壽輝)と龍鳳(小明王)とは元朝仆壞の二大張本で平胡の主役は此の兩人で盡くるのである。然るに之等が偶々紅巾教匪の二大系統(彌勒・白蓮兩教派)を代表せるものと考えらるゝ事は洵に興味津然たるものでなければならぬ。従て余は以下項を分つて二大教匪軍の成立並に活躍の概要を説くこととする。

(一) 彌勒教系の紅軍

元末に於ける國家の綱紀の廢弛や國防力の積弱に伴ふて、革命匪亂が各地に勃發したが、其の先驅とも認むべきは元晋宗泰定二年（西紀一三二五）河南息州（息縣）の趙丑斯・郭菩薩等の彌勒教匪の叛亂であつた。之に次いで元順帝至元三年（西紀一三三七）には河南陳州（淮陽縣）人胡棒（名は閩兒）の汝寧府信陽州（羅山縣）に於ける反起で、これらはいづれも當時の史料に據ると彌勒佛の降來説に附會せるもので、疑もなく唐宋以來の彌勒教匪の系統に屬するものであらう。之等に踵いで至元三年（西紀一三三七）には廣東增城縣（增城）の妖民朱光卿が定光佛の再來降臨説を藉りてその黨石昆山・鍾大明等と俱に大亂を作したが、更に其翌四年には又江西袁州（宜春）の妖僧彭瑩玉の弟子周子旺がその師に煽動されて袁州に據つて彌勒教徒を惑集して叛亂を起し、自から周王と稱し年號をも改めた。之等諸教匪亂の頻發に由て大元帝國の内部的崩壞の一端が内外に暴露するに伴ひ、順帝至正十一年（西紀一三五二）五月河南潁州の白蓮教徒劉福通等の紅巾教匪の勃發と俱に、同年八月には江蘇蕭縣の妖人芝麻李（本名閩兒）が徐州に據て叛旗を翻へし、之と前後して同月湖北の東南境から斬黃派の紅巾匪徐壽輝等が動亂を作した。此の斬黃派の紅軍は曾て順帝至元四年（西紀一三三八）江西袁州（宜春）で叛起した周子旺及びその師彭瑩玉（彭和尚）等の彌勒教匪を代表せるもので、從て潁上から崛起した彼の白蓮教主韓山童の教旨を奉ぜる劉福通・杜遵道等の紅巾匪とは多少系統上の差別が認められるのである。

元史や草木子などの記事を綜合して考えると徐壽輝は本湖南の出身であつたが、平生販布を業として斬・黃兩州の

間を往來し、終に羅田に家居してその地の客家となつたらしい。その爲人は體貌魁偉、木強にして寛容の性質の外、他の能力なき全く一介のロボット的人物であつて、發亂當時之を首領に推戴したのは全く彭和尚や鄒普勝等の策謀に依るものだと曰はれてをる。されば庚申外史にも

(紅巾)起_ニ斬_一・黃_ニ者_一。宗_ニ彭瑩玉和尚_一。推_ニ徐貞一(壽輝)_一爲_レ首。

とあつて、此の派の陣營中、彭和尚の占むる位置が可なり重要なものであつたことを裏書してゐる。葉子奇の草木子に據ると彭和尚は江南瀏陽の人であり、徐壽輝も亦、本、湖南人であるといへば或は同郷の關係から兩者は夙に深く拘結してゐたものではあるまいか。此の妖僧は草木子によると、

瀏陽有_ニ彭和尚_一。能_ニ爲_レ僞_レ禪_一。勸_レ人念_ニ彌勒佛_一。

とあるから、明太祖實錄に袁州慈化寺僧彭瑩玉。以_ニ妖術_一惑_レ衆。とある謂ゆる妖術も畢竟彌勒佛の念僞禮拜に關聯してゐることは明かであるから、元末順帝初年の河南教匪の趙丑斯・郭菩薩や胡棒などこそその信仰系統を一にせる彌勒佛の再來や劫運の轉生を説く本來の彌勒教匪に屬してゐたことは殆ど疑の餘地がないやうである。次に彭和尚と徐壽輝の宰相鄒普勝との關係を見ると明太祖實錄(徐貞一本傳)に、

袁州慈化寺僧。彭瑩玉。以_ニ妖術_一惑_レ衆。其徒周子旺。因聚_レ衆欲_レ作_レ亂。事_ヲ覺。元江西行省。發_レ兵捕_ニ誅_レ子旺_一。瑩玉等走_ニ淮西_一。匿_ニ民家_一。捕_レ不_レ獲。旣而麻城人鄒普勝。復_ニ以_ニ其術_一。鼓_ニ妖言_一謂_ニ『彌勒佛下生當爲_ニ世主_一。』遂起_レ兵爲_レ亂。以_ニ壽輝相貌異_レ衆_一。乃推_ニ以爲_レ主_一。學_ニ紅巾_一爲_レ號。

と記してをるが、之に由ると斬黃派の紅軍が徐壽輝を以てその統領に推したのは彭和尚とそ其徒鄒普勝等の差金から

出たことは明かであると共に鄒普勝も亦彭和尚の門弟子であつたことも亦疑の餘地はない。

以上述べた處によると、徐壽輝を首領とする「黃派」の紅巾は、殆ど其の總參謀格たる彭和尚と、其の門弟子の鄒普勝（壽輝の宰相）等の彌勒教徒がその中心勢力を形成せるものであつた。かゝる意味から云へば此の紅巾に於ける彭和尚の教門上の位置は當然汝潁派紅巾に於ける小明王のそれに匹敵すべきものであつたが、但、周圍の事情や彭和尚の個人的境遇などから小明王の如くその教匪團の首領として推戴さるゝに至らなかつたやうである。

斯様に蕪黃派紅巾の中心人物であつた彭和尚は本名彭瑩玉又は彭翼（平胡録。饒州志作彭翼達）といひ、彭祖師（俞本皇明記事録）妖彭（草木子）などの俗稱を有つた元末紅巾教匪中、最著名の妖僧であるが、彼の出自や爲人に就いて庚申外史は一つの興味ある逸話を傳へてゐる。それは既に前にも述べた如く元順帝至元四年（西紀一三三八）

此の彭和尚の徒弟周子旺が袁州に據つて反亂を起した際、和尚は彼に教えて寅年寅月、寅日寅時に同志と一蹙に叛起することを勧め、又その徒をして、皆な悉く背心に佛字を書して、之を以て刀箭の傷害を禁咒せしめ、その教徒五千餘人を聚めて叛亂を作したが脆くも官兵の爲め一舉にして殲滅されて周子旺や彭和尚の妻佛母及びその二子天生・地生は擒斬せられ、和尚自身は辛じて危地を脱して淮西に奔走、その地の民家に匿れたのであつた。余は嘗て白蓮教の道人が妻帯の火宅僧であつたことを説いたことがあるが、此の庚申外史の文を讀むに及んで彭和尚の屬する彌勒教の道人も亦之と類を同じくせる破戒の火宅僧であつたことを知ると共に、吾々が國録倉・室町時代の他力易行門や優婆塞宗門の勃興が如何にかゝる宋元時代の邪宗門の影響を受けてゐるかを回想して一段の興味を覺ゆる次第である。閑話休題。庚申外史は更に彭和尚の出身や誕生の奇蹟などについて下の如く述べてゐる。乃、此の和尚は元、袁州慈化寺の東の

一庄村の民家の子であつたが、一夕大雪の際、慈化寺の住僧六十餘歳の彭某といへる者が東方二十餘里の村庄に當つて紅烟半天をこがすといふ光景を見、翌日村老を召して失火の有無を詢ねたるに何らの異常なく、唯々舎下の媳婦が一兒子を生んだのみといふことであつた。仍で兼て觀氣の術に長じた此の老僧はその生兒を徒弟として收養せんことを乞ひ、十歳の時、遂に之を入門せしめて佛道を修行せしめたが、此の子は少時より能く吉凶禍福を預言し、又南泉山下の洌泉を酌みて能く百病を治療するといふので遠近の愚民は翕然として之に神事したるやうである。それで周子旺を首領とする至元四年の袁州彌勒教匪の叛亂も實は此の彭和尚の方寸から起つたものであつたが、彼が淮西に奔竄した後も妖術を以て其地の愚民を誑惑した爲めに、官憲の嚴重なる追捕にもかかわらず、その信徒・民衆が之を庇護して遂に捕獲を免かれたといふ事である。

以上は彭和尚の出自業跡について庚申外史が説く處の大要であるが、之等の記録の傳ふる處を綜合して考一考する時は如何に當時の彌勒教匪の蠢動・閭躍が熾烈であり、又河南・安徽（淮西）・湖北・江西（趙丑斯・郭菩薩・胡棒・彭和尚及其門徒）等の東南各省の廣汎なる地域に亘つてその地盤を有つてゐたかといふ事實が判明するのである。

徐壽輝を首領とせる斬黃派の紅巾軍が鄒普勝・歐普勝・倪文俊等を始めとして陳友諒・趙普勝・明玉珍・孟海馬・布王三等の統帥の下に如何に湖・廣・江西・安徽・浙閩・四川・雲南等の各省を侵掠攻略したかといふ、此の派の軍事活動については元明の實錄正史を始め、當時の諸記録に網羅詳述されてゐるから此處に改めて余の縷述を必要としないが、唯々至正十一年八月此の徒が叛起し斬水に據つて徐壽輝を皇帝に推戴し、國を天完、年號を治平と稱してから、麾下の驍將陳友諒の爲めに至正二十年五月、徐壽輝が弒篡さるゝまで大約十年間、前記長江流域の廣汎なる沃土

に據つて宗教的軍事國家の態勢を維持した此の派の紅巾教匪の偉大なる勢力は元末の革命史上決して輕々に看過することの出来ないものである。

(二) 白蓮教系の紅軍

此の派の紅軍の起源については元史順帝紀に、

至正十一年五月辛亥。潁州妖人劉福通爲亂。以紅巾爲號。陷潁州。初欒城人韓山童祖父。以白蓮會。燒香惑衆。謫徒廣平永年縣。至山童。倡言。『天下大亂。彌勒佛下生。』河南及江淮愚民。皆翕然信之。福通・杜遵道・羅文素・盛文郁・王顯忠・韓咬兒。復鼓妖言。謂『山童實宋徽宗八世孫。當爲中國主。』福通等殺白馬黑牛。誓告天地。欲同起兵爲亂。事覺。縣官捕之急。福通遂反。山童就擒。其妻楊氏。其子韓林兒。逃之武安。

とある文に由て明かだが、此時、河北省欒城縣の白蓮教主韓山童の教を奉ずる劉福通・杜遵道等の徒が潁州（安徽阜陽）に據て叛起したのが汝潁派紅軍の起源で、之が白蓮教系の紅軍の本幹を爲すものである。庚申外史は此の派の紅軍を潁上派としてゐるが、余は初期の地盤關係に基いて之を汝潁派と呼ぶことにする。

既に前掲元史の本文に見える如く、始め劉福通等の白蓮教徒は其の教主韓山童を奉戴して各地の同志が一整に叛亂を作さんと計畫してゐたが、不幸彼等の豫期に反して未然にその陰謀が發覺したので、福通等は山童との連絡も充分取れない中に、至正十一年（西紀一三五二）五月遽かに潁州に據て叛起したが、一方韓山童は官兵に擒へられ、其の

妻子楊氏韓林兒等は危く身を脱して武安（山中）に匿れたのである。併ながら此の母子は其の後至正十五年（西紀一三五五）二月に反つて劉福通等に由て江蘇碭山縣附近の夾河鎮から安徽の亳州（亳縣）に迎え取られ、此地に據つて帝位に即き、國號を宋、年號を龍鳳と稱した。之から以後、此の派の紅軍は名實共に白蓮教系教匪軍の大宗本幹として天下の同志に號令するやうになつた。汝潁派の紅軍がかゝる強大な威望を得るに至つた所以は第一に元末の紅巾教匪の大亂に當つて最先頭を切つて大事を擧げたことにも因るが、それよりも更に重大な原因は永年に亘つて扶植した河南・江淮間に於ける白蓮教會の牢乎たる地盤と勢力とを巧に利用したことにあるらしい。

從て此處で余は姑く礪城韓家の白蓮教會の發展について一應考えて見ることにする。

此の教會の起源について最も要領を得た記述は本項の初に掲げた元史（順帝紀）の文で、明史（韓林兒傳）も大體之を踏襲してをる。併乍ら元史の此の文は恐らく權衡の庚申外史の記事などを參考敷衍したものと思はるゝから、此に參考の爲めに庚申外史の文を掲げる。即ち、

（至正十一年）五月。潁川潁上紅軍起。號爲香軍。蓋以燒香禮彌勒佛。得此名一也。其始出趙州礪城縣。韓學究家。已而河淮襄陝之民。翕然從之。故荆・襄・漢・許・汝・山東・豐・沛。以及兩淮紅軍皆起應之。（庚申外史）

と云ふのがそれである。儲、之等の史料に依て礪城韓家の白蓮教會の發展を通觀すると、順帝至正十一年亂を作さんとした韓山童の白蓮教會は少くとも其の祖父韓某の時代から傳來せるもので、韓某は當時既に燒香惑衆の罪に坐して河北の永年縣に流謫せられ、其の時已にその教會は禁止の阨に遭つた筈である。然るに至正十一年劉福通等が潁州に

據て叛起した際、河南・江淮から襄・陝各地に至るまでその教民が翕然之に響應したといふ前記の文献に照すと礪城の白蓮教會は韓山童の祖父韓某以來、之等各地で、潜行的に官憲の眼を掠めて布教宣傳を繼續してゐたものと見なければならぬ。而して庚申外史に礪城縣の韓學究とあるは山童本身を指すのか或は其の祖父韓某を指すのか稍々明瞭を缺ぐが學究の語は元來唐代取士の科目の一たる、一經專問の應試の書生を指せるもので、柯劭忞は其の新元史（韓林兒）に於て『山童嘗爲童子師。人稱爲韓學究。』と云つてゐるから、姑く之に従て余は之を韓山童その人と視做しておく。いづれにしても礪城の白蓮教會は少くとも山童の倡亂當時（至正十一年）を遡ること約三、四十年前以前から傳來したもので、その地盤・根柢は頗る牢乎不拔のものと見ねばなるまい。柯劭忞は同書に於て、韓林兒の籍貫を以て『永年人、其先本礪城人』とせるはその曾祖が廣平永年縣に謫徙された點から推定した結果であらう。此の白蓮教會の組織機構等に至つては今日徵檢すべき資料はないが、此の派の末流と目すべき明末天啓時代（西紀一六二一—二七）に河北省灤河下流域の灤州に據つた王森等一派の白蓮教會について、明の黃尊素（説略）が説く處を見れば略々その一斑が推測せらるる。即ち之に依ると、

（王）森依其術。創爲白蓮教。自稱聞香教主。立大小傳頭。會首名色。此輩彼引。雲合響應。頂禮歸命。蔓延偏于京東・京西・山東・河南・山・陝・四川六省。不下二百萬人。森移住（自蘄縣）灤州石佛庄。其徒見者。俱稱朝貢。各歛積香錢。絡繹解送。或盛停別所。以待支用。省直府縣。各設公所。使傳頭者。守之。置竹籤・飛籌・印烙三王字號。凡有風信。頃刻可傳千里。撮合俚言誑説。刊作經文。分授徒衆。

とあるが、此の中特に注意すべきは聞香教だとか、石佛庄等の文字である。韓山童の白蓮教系の紅巾は一に香軍と呼

ばれ、それは『燒香禮彌勒佛』から名を得たものとされてゐるが此の香軍と王森派の白蓮教匪の間。香教とは何らかの傳統・脈絡があるのではないだらうか。又石佛庄の文字も其の地名に因める著名の石佛が存在した爲めに起つた庄名であらうが、之も韓山童等の白蓮教と全然因縁がなくはない。葉子奇の草木子に據ると元末參議の賈魯が南決の河道を禹の故道に開鑿すべく、黄河沿岸の丁夫二十六萬餘人を發して開河の大事をやつた際、挑河工夫の怨望や民心の不安動搖に乗じて天下の大亂を鼓煽せんが爲めに韓山童等は詐術を挟みて、陰かに一隻眼の石人を作り其の背に『莫道石人一隻眼。此物一出。天下反』と鐫り刻んで豫め當開の河道に埋め、之に因て遂に亂階を作つたと傳へてゐるが、之等の石人、石佛は必ずしも白蓮教會と偶然の緣故ではないやうである。又黃尊素（説略）によると、王森が燒香惑衆の罪に坐して灤州で執へられた時に、京師の貴親、永年伯に投じてその族を假冒して罪を免かれたとあるが、河北の永年縣は曾て韓山童の郷貫となつた地であることなどを想起すると多少牽強の嫌はあるが王森派の白蓮教會は韓山童等の流れを酌むものと考えられないことはない。従て時代の高下に因る差異は別としても王森派の白蓮教會の組織機構によつて韓山童等のそれを推測することは必ずしも誣妄の見解ではない。恐らく山童發亂當時の欒城派の白蓮教徒の勢力も黃尊素の記事に見ゆる王森派のそれと大なる程徑は無かつたものと思はれる。

以上に依て余は大體、元末欒城派の白蓮教會發展の概略を述べたから、次には此の派の活動及びその消長の一般を紹介して此の項を閉ぢる。

劉福通等の汝潁派紅巾軍は至正十五年初頭韓林兒（小明王）を亳州に迎立したことは既に述べたが、當時彼等は林兒を皇帝に、その母楊氏を皇太后に戴き、杜遵道・盛文郁を左右丞相に、劉福通・羅文素を平章に、福通の弟劉六を知

樞密院事に夫々任命し、之等は各々その子を遣して小明王の入侍せしめ、又河南鹿邑の宋の太清宮の工材を取つて亳都に宮闕を築いた。當右丞相となつた杜遵道は小明王の信任も篤く、從て亳都の權力は多く此の手に歸してゐたらしい。彼は本來元の國子學生として、知樞密院事馬札兒台上書して、武舉を開いて天下智謀勇略の士を網羅せんことを獻言し、その信任を得て樞密院の椽史に採用された官歴を有する黨中のインテリに屬して最も材幹機略に富でゐた。仍で劉福通等と權力争の隙を生じ遂に此の爲めに殺されてしまつた。之から福通が丞相・大保として亳都の政・軍兩權を統べ天下の紅軍に號令するやうになつた。

斯くて其の麾下の諸軍に命じ分道攻略の策を立て本文の初に掲げた紅巾一覽表に示した如く李武・崔德・李喜々・白不信・大刀敖等を陝・甘方面に、關先生・沙劉二・破頭潘等を冀・晋・熱・察・遼東・高麗方面に、毛貴・田豊・王士誠等を山東・河北に、郭子興・彭早住・趙均用等を淮南に、郭天敘・張天祐・朱元璋等を江淮各地に、夫々經略の手を伸ばさしめた。一方、至正十一年劉福通等の汝潁軍に響應して徐州に據つて叛起した芝麻李等の紅軍は翌年九月元の丞相脫トクト々の爲めに脆くも敗られて城陥り、芝麻李は擒斬せられ、その徒彭大（父子）、趙均用等は濠州（臨淮關）に奔つて郭子興の淮南軍に合した。

かゝる中に、福通等の紅軍は北進して一時汴梁を陥れたが、間もなく至正十五年冬、元將答失八都魯の爲めに之を奪還せられしのみならず、引つゞいて太康を陥れられ、國都亳が圍まれたので劉福通は之を放棄し、小明王を奉じて安豊に遁げた。汴梁は此の後數々汝潁軍と元兵との争奪の區となつたが、至正十八年五月福通は三度之を陥れて安豊より小明王を迎えた。然る翌年八月再び元將察罕帖木兒の爲めに回復されて復々安豊に潰奔した。爾來劉福通等汝潁

紅軍の本據は引つゞき安豊にあり、麾下の諸將が各地で活躍せるにも係らず、安豊の汝穎軍は殆ど目覺しき活動を見せず、遂に至正二十三年二月蘇州に據れる張士誠の部將呂珍の爲めに安豊を陥れられ、明祖朱元璋の救援を受け劉福通等は小明王を奉じて滁洲（滁縣）に遁走した。其の後朱元璋は斬黃派の陳友諒を仆して湖廣・江西・安徽を取り、蘇州の張士誠を擒して江東・浙閩各地を領有して一統の羽翼漸く成るに及び、至正二十六年末部下の將廖永忠に命じて小明王・劉福通等を金陵（南京）に迎えしめたが、廖永忠等は途中之を瓜歩の渡で溺殺してしまつた。此の年迄朱元璋は小明王の龍鳳の年號を用ゐ、その敍任をも受けて表面上汝穎派紅軍の麾下に屬してゐたが、此に至つて朱元璋は名實共に新興王朝の元首として天下の民心を收攬して北伐を完成し一統の大業を完成せんが爲めに、永忠等に内命を衝めて、小明王とその大保劉福通等を瓜歩に沈めてしまつたものと見える。明祖朱元璋の陰險狡猾なる政策やその慘虐不忍の性格などについては次號に於て詳しく論述するであらう。

いづれにしても欒城派の白蓮教會を中心とせる元末の紅巾教匪の本宗たる汝穎派はかくの如くにして没落し終り、爾來此の派の白蓮教會はその同志の一人たる朱元璋の建設した明朝の、歴代帝王に依つて異端宗門として異常の彈壓迫害を受けながら、終に清代までその傳燈を持續して歷朝統治の一大痼種となつたものである。

汝穎派紅巾の枝隊中、特に注目し値するものは朱元璋等の江淮軍であるが、之に關しては次號に述べることにし、その他の者について特に注意すべきは山東毛貴軍と、遼東・高麗に侵入した關先生等の紅軍とである。當時の紅軍經略の特長としては概ね劫掠焚陷を主とする破壊的な方面のみ多く、攻略せる城池郡邑に建設的な施設を行ふことなどは殆ど認められなかつたのであるが、獨、山東の紅巾毛貴に至つては他と類を異にし、山東の濟南に據て賓興院を立

て、故官を選出して占領地を分守せしめ、又その領内に三百六十餘の屯田を作つて軍・官・民の食糧を増産・蓄積し、官民の田は一樣に十分の二を徵税し、海陸の交通運輸の系統を整備して非常の變に應ずるなど亂世の應急施設としては頗る見るべき統治の成績を擧げたが、不幸にして其後淮安から官兵に逐はれて來奔投歸した徐淮派の紅軍の部將趙均用等の爲めに暗殺されてその雄圖も空しく中道にして挫折した。之とは全く別の意味に於てはあるが、次に注意すべきは遼東・高麗方面に侵入した關先生・破頭潘・沙劉二等の紅軍の活動である。之に關する元明史料は頗る曖昧糲糊としてその眞相を捕捉し難い。

元史（順帝紀）には

（至正十九年十二月癸酉）關先生・破頭潘等陷上都。焚宮闕。留七日。轉略往遼陽。遂至高麗。と丈ヶ述べて其後の此の紅軍の動靜を明かにせず、僅に至正二十三年三月の條に於て

是春、關先生餘黨。復自高麗還。寇上都。李羅帖木兒擊降之。

とあつて、至正十九年から二十三年に至る三年有餘の此派の紅軍の活躍については何らの手繋かりが得られない。翻て庚申外史を見るに、

至正十八年（冬）關先生・沙劉二・破頭潘等。由大同。直趨上都。焚毀宮殿。犯虎賁司。去上都二百里。世祖所立三十六屯在焉。

といひ、更に其翌年の劈頭に於て

破頭潘・關先生趨廣寧（南滿・洲北鎮）。焚魯王宮府。駐軍遼陽。

とか、或は之に續けて、

至正二十年五月、破頭潘・關先生・沙劉二軍。入高麗王都。高麗王奔耽羅。其臣納女請降。將士皆以女子配。遂與高麗如姻婭往來。高麗人各藏其馬林中。一夕傳王命。除高麗聲音者。不殺。其餘並殺之。沙劉二・關先生皆死。惟破頭潘・裨將左李。率輕騎萬人。從間道。走西京(宣德)。降李羅。

と云つてをる。徐乾學の通鑑後篇や畢沅の續通鑑などは、元史に明記せる至正十九年十二月、此の紅軍の上都焚陷後七日にして遼東に侵入した記事を誤つて七月に改作し、従つて關先生等の遼東の侵犯のデートを至正二十年半ばと見て、關先生・沙劉二等の高麗王都の受難・破頭潘裨將左李等の西京敗退の時日を至正二十年十二月にかけ、錢謙益の國初羣雄事略も之に従つてゐる。然るに柯劭忞は何に血迷うてか新元史(韓林兒傳)に於て之を至正十九年に繋げ、關・劉始め紅匪の大部分は坑殺されて獲免者。十無一二焉といつてゐるが誤謬と誇張の見本でなくば幸である。

然し此等一聯の支那史家は憾らくは高麗側の史料の参考を忘れてゐた。鄭麟趾の高麗史に據ると恭愍王八年(至正十九年)二月乙酉には之等東北面經略の紅軍の飛機が開城の王庭に傳達せられてゐる。その檄文を見ると、

慨念生民。久陷於胡。倡義舉兵。恢復中原。東踰齊魯。西出函秦。南過閩廣。北抵幽燕。悉皆歎附。如下
飢者之得膏粱。病者之遇藥石。今令下諸將。嚴戒士卒。毋得擾民。民之歸化者。撫之。執迷拒拒者。罪之。

とある。恐らく之は遼東の邊境から、小明王の正朔元號に因て、關先生等が恭愍王に送つて其の降服を促したものであらう。之に對する恭愍王の因循姑息の態度から大學東伐の軍に發展したらしく、同年十一月甲辰には遼瀋地方の流

民二千三百餘戸と俱に此の方面に移住せる多數の高麗人が紅軍の來襲に脅かされて鴨綠江を渡つて半島に避難してをる。之を追尾するか如く同月戊午に三千餘の紅軍が鴨綠江を渡つて咸北地方を掠め、十二月には紅軍の將毛居敬が四萬の大軍を率ゐて義州を陥れ、尋で年末高麗の西京を取り、翌九年（至正二十年）更に南進して豊・安・黃等の諸州を侵して次第に王都に迫つたが、十年（至正二十一年）冬十月、遼東紅巾の本隊、破頭潘（本名、潘誠）沙劉二・關先生等の大軍が鴨綠江を渡つて大擧高麗に侵入し、其年十一月辛未遂に國都開城を陥れ、恭愍王以下の王侯貴族等は皆な耽羅に逃がれたのであつた。高麗史に據ると恭愍王の臣僚が紅巾將士を欺いて納女投降の詭策を用ゐ、不意に襲ふて關・沙以下の紅軍幹部將兵を擧殺したのは此の翌十一年（至正二十二年）正月の事である。されば元史（順帝紀）に至正二十三年春關先生等の餘黨が高麗から引還して上都に寇し孛羅帖木兒に擊破されて之に降つたと稱するものは破頭潘等が前年正月高麗開城から遁がれて遼東に歸還したものゝ一部でなくてはならぬ。

斯の如く關先生・沙劉二・破頭潘等の東北面の紅軍の活躍については、高麗史に由つてのみ始めて元史の缺を補ひ得ると共に、其の真相をも把握し得らるゝのである（未完）。